

『奥武蔵・雨乞い龍神紀行』

「峠の道標」 特別編集版

奥武蔵の山々に暮す人々は、都会の話題にはあまり関心がない。むしろそれより、尾根向こうの村々の出来事に興味を示す。昨今は情報化社会といわれて著しいが、かつての情報源といえば村を通る旅人や行商人の語る話が殆どだった。その昔語りはいつしか伝説と化し、龍や天狗が空を飛び、あるいは野山をオーサキが駆け巡る。



しかし、そんな昔語りを一笑に臥してしまうのはたやすいが、伝説は常に奥ゆかしくいにしへの事実を内包している。そしてそんな奥武蔵に残る数多の里譚の中でも、もっとも生活に結びついていたのが雨乞いである。そこで今回は雨乞い龍神に纏わる伝説を拾いながら、越生龍穩寺から旧名栗村の有間（有馬）の大淵へと旅立った。

奥武蔵の村々にはそれぞれに雨乞山や雨乞淵があり、雨乞いはとりもなおさず山村での暮らしに直接結びついていた。古くから伝わる雨乞いの方法も、麦殻で象った龍神に祈祷する、あるいは獅子舞によって雨を呼ぶなど様々だ。そして、今では有間の大淵といっても訪れる人もいないが、一昔前まで奥武蔵で雨乞いといえば大淵の龍神の名は広く知られた存在だった。伝説によれば越生龍ヶ谷の龍淵には龍が棲みつき、度々高山不動の真上を飛行していたという。しかしある日の事、これに業を煮やした不動尊はこの龍を智剣で斬りつけた。龍は寸でのところで身を交わしたが、尾は切り落とされて越生西和田の尾崎に飛び、以来有間谷に棲みついて再び龍ヶ谷に戻る事はなかったという。

—越生龍穩寺から高山不動尊—



越生の龍穩寺は小永平寺といわれた名刹で、関東の曹洞宗寺院を束ねていた。江戸時代までは天下の鬼道場として一世を風靡した寺院である。龍穩寺は開山を無極禪師としているが、実質的には中興といわれる三世泰叟が、文明四年（1472）に太田道灌・道真父子の外護を受けて開山したとよい。『龍穩寺縁起』によれば龍ヶ谷には古くから大きな池があり、そこに棲む龍神を退治した後に龍穩寺を創建したとしている。また、その龍神が次に棲家としたのが有間の大淵とも記されている。つまり、著名な雨乞い龍神の発祥地は、伝説どおりこの龍ヶ谷だったというわけだ。

越生町の龍ヶ谷と飯能市名栗の有間山はかなり遠くも感じるが、そのじつ、山々を越えて歩けばさほどでもない。龍穩寺の目前には秩父街道が飯盛峠に向かい、途中で高山道と秩父道に道を別ける。路傍の道標によれば、高山までは一里程度の道程である。ただし、以前はハイキング道として使われていたその古道も、山上に林道が開通するに及んで全くの廃道となってしまった。従って

現状では黒山の横吹峠しすんみちから四寸道と呼ばれる古道を辿るほうが現実的かも知れない。この古道は往古より高山不動への参詣道といわれ、明治維新となって修験道が衰退してからも高山街道として使われていた。急勾配となる箇所は掘り切られ、余った土砂は尾根筋を平坦に繋ぐために用いられた。先人達が苦難の末、残してくれた土橋である。そして前述の龍ヶ谷からの古道は、その土橋の所で高山街道に接続していた。



ところで、龍ヶ谷から一つ尾根を越えた黒山にも有間の龍神の伝説が残っている。現在、埼玉県でも有数の観光地となっている黒山三滝は、戦前までは修験の行場として知られていた。やはり室町時代に黒山霊場を栄円が開いた山本坊は、やがて本山派二十七先達といわれるまでに勢力を拡大した里修験である。その聖地と呼ばれる大平山は黒山三滝の山上にあり、そこには栄円の五輪塔の他、幕末に建立された役行者像がある。が、もとは山本坊の影響を受けた修験系寺院であった黒山の全洞院も、近世以降は龍穩寺末となって多くの村人達はその檀家となっている。或いは雨乞いの儀式を伝えたのは、この龍穩寺の末寺だったのかも知れない。

かつてこの黒山村で行われた雨乞いの儀式は、越辺川の源流近くにある龍ヶ淵で行われた。この淵は有間の大淵と地中深く繋がっているといわれ、淵の傍らに海軍中将佐藤鉄太郎の書による「千代を経て澄みこそまされ龍が淵 常盤に楓の色を宿して」という歌碑が建立されている。黒山村の人々は日照りが続くとこの龍ヶ淵をかき回して雨乞い塚に登り、赤地の旗に「雨 龍奉」と大書して「有間山のタツン坊、黒雨ざんざと降ってくれ」と唱えながら有間の龍神に雨を乞うた。現在は顔振峠展望台と呼ばれ、多くの観光客達が訪れる雨乞い塚も、そうと知って訪れる人は殆どいない。

因みにこの雨乞い塚の北側斜面の地名を「面振」かあふりという。だが『新編武蔵風土記稿』黒山村三滝項に「河フリ峠」とあることから、本来は川に雨水を振り分ける分水嶺を意味するのだと思う。山

容も見事な台形をしていることから、昔日の村人たちはこの山で雨乞いを行えば、おのずと村々が潤うことを知っていた証左ではないだろうか。ともあれ、^{かあぶり}顔振峠（河振峠）という地名と雨乞い龍神はまるで無縁というわけではなさそうだ。



さて、話がだいぶ逸れてしまったので話を戻すが、高山街道はやがて七曲りにさしかかり、隠れ不動前の馬頭観音を通り過ぎて尾根に乗る。そこはちょうど花立松ノ峠と関八州見晴台（高山不動奥の院）との中間の鞍部で、残念ながらその先は奥武蔵林道（グリーンライン）に断ち切られている。だが、ここからグリーンラインに降り立ち、ほどなく歩けばやがて山ノ内鳥居跡にでる。そこは高山不動の山城を示す鳥居があった場所で、草むらの中に今も仏の刻まれた道標が二基並んでいる。そこからは武甲山から連なる子ノ権現や吾野岩殿観音はもちろんの事、有間の山々までも一望のものとなる。山波遙かに目をやれば、いつ龍神が飛んできて不思議ではなさそうにも思える。



高山不動は関東三大不動といわれ、かつては醍醐三宝院直末の修験道場として栄えた。その歴史は古く、縁起によれば白雉五年（654）、藤原鎌足公より関東視察の命を受けた長覚坊上人、宝勝坊上人、岩田三兄弟の五人が下向した際、この高山が霊地たる事を感じて不動明王像を安置した事にはじまる。霊亀二年（716）に行基菩薩が奉安したと伝わる五大明王像（不動、降世、軍荼利、大威徳、金剛夜叉）のうち、奇しくも焼失をまぬがれた軍荼利明王像は、埼玉県内でも最古に属する平安仏といわれ、現在、国の重要文化財に指定されている。また、龍穩寺の無極禅師が参籠して奉納したものに五大明王御影板及び無極奉納文一篇があり、高山不動が龍穩寺の奥の院といわれる所以となっているのだ。

しかし、往時には威徳を誇っていた高山不動も、やはり江戸幕府瓦解の後は凋落の一途を辿り、江戸末期に再建された豪壮な不動堂に、往時の繁栄を偲ぶより術がない。しかし、この鄙びた山寺がどこか懐かしく思えるのは私だけではないだろう。樹齢八百年余の大銀杏から杉の大木に囲まれた急な石段を上り詰める時、一頻り一昔前の巡礼者になった感慨すら覚える。因みに前述のごとく、伝説では有間の龍神はこの高山の不動尊に尾を切られている。この為、さしもの霊力を誇った有間龍神の霊水も、ついに

この高山に雨を降らす事はなかったという。

関八州見晴し台は高山不動奥の院として知られているが、高山集落はそこを中心とするいくつもの支尾根に跨り、かつて不動尊の霊域が広大であった事を今に伝えている。『新編武蔵風土記稿』によれば、高山村のうち半数は農民と御師を兼ねていたという。不動堂から高畑に向かう途中で道を別け、萩ノ平を経て西武線西吾野駅に向かう道は西の参道と呼ばれ、現在でも多くのハイカー達が通り過ぎる。その西の参道にあるのが本参道への分岐で、「左 あがの」と刻まれた石の道標と天保四年（1833）の地藏尊が建立されている。



じつは高山不動の本参道とは前述の四寸道をいう。高山不動に残る「御七ヶ所鳥居版木」には一の鳥居を川角村とし、龍ヶ谷を経て山ノ内鳥居までの道筋が描かれている。しかし、時代を経るに従い、何時しか吾野から瀬尾、大久保を経て高山不動に向う道が本参道と呼ばれるようになった。少し余談になってしまうが、瀬尾には高山分岐の所にオーサキ岩と呼ばれる岩があり、かつてそこには山番をするオーサキが群がっていたという。オーサキは奥武蔵の不思議な怪獣で、尾の裂けた尾先狐ともいわれ、取り付かれた家は富を得るが近隣の家々からは忌み嫌われてしまうという。

さて、西の参道も井尻の分岐を過ぎれば、やがて萩の平に至り、古道も徐々に降下を始める。一頻り掘割の道を降ればやがて開けた場所にて、住宅地に架かる橋を渡れば西吾野駅もそう遠くはない。橋の袂には古い道標があり、「右高山・左志かう・道」と刻まれている。この道はもともとブナ峠を越えて都幾川村の慈光寺への巡礼道でもあったのだ。その道標からは舗装路となり、左上に西吾野駅を見て、山崎からかつての秩父往還我野通りを踏襲した国道299号線に出て小床橋へと向う。

一子ノ権現小床参道から竹寺一



その小床橋を渡った子ノ権現こいか小床参道は、途中の民家までは舗装路だが、路傍に建立された六面幢（宝暦五年・1755、笠付の六地藏）が、いやでも参詣道の雰囲気醸し出している。やがて民家も途切れて道がいよいよ参道らしくなると、岩間の切り通しとなる所に清心地蔵が祀られている。昔、子ノ山の清心という僧が独力でこの切り通しを設けた。このお地藏様は、後に村人達が清心さんを偲んで建立したものだそうだ。今さらいうまでもなく、この参道は日々多くのハイカーに踏まれているので、路傍の丁目石と相まって雰囲気は良く、そのまま行けば小一時間で子ノ権現に着くだろう。しかし、今回は清心地蔵手前の分岐から小床峠へと向う事にする。

この道はもともと小床集落から青場戸集落を繋いでいた旧道で、沢沿いを進むとやがて岩上に祀られた山ノ神祠を経る。じつは民間で祀る山ノ神とは大山祇命などの山祇とは違い、春先に山から里に下りてきて農作物を豊穰に導いて後、秋になって山に帰るとされている。この為、農家の守り神として山上に祀られる事が多いので、山間地ではこの山ノ神と同様に周辺に耕作地跡が散見できる。現在ではそうとは思えないような深い森も、かつては村人達の笑い声がする明るい耕作地だったのだ。

やがて静寂に包まれた道を登りつめると、そこが越沢の小床峠である。青場戸へ向かう旧道の沢沿いにはかつて耕作地だったであろう平地が点在し、周辺に石垣がめぐらされている。狭隘な山村での人々の暮らしは、ほとんど自給自足だったという。やがて道は芳延参道舗装路に切り通された擁壁の上になる。そして、そこから階段を下りた所にある青場戸不動堂は集会所を兼ねていて、御堂の傍らには五基の庚申塔が建立されている。おそらくこの御堂で、青場戸の人達は庚申待ちを繰り返したのではないかと思う。しかし、道ゆくハイカー達の殆どは、この場所には関心を示さず通り過ぎて行く。

不動堂脇の滝は不動滝といわれ、かつては雨乞いも行なわれていたそうだ。滝の対面となる擁壁上には「天龍不動尊」が祀られ、子ノ山の龍神伝説も伝わっている。見るからに龍神が空に舞上りそうな滝ではあるが、残念ながら子ノ権現では天龍寺の龍神伝説との因果関係はないとしている。そもそも子ノ山龍神伝説は、子ノ聖が月山の峰から投げた教典に導かれ、子ノ山の中腹に辿り着いたところから始まる。だが、子ノ聖が訪れた事を知った悪鬼どもは、登山を妨げる為に子ノ山に火を放ち、大火傷を子ノ聖に負わせてまんまと窮地に至らしめた。しかしこの時、にわかには龍神が天空を駆け抜け、暴風雨を呼んで子ノ聖を救った後、悪鬼を残さず退散させて十一面観音の御姿になったという。これが現在の青場戸集落最奥に架かる橋の所で、悪鬼を退散させた事に因んで降魔橋と呼ばれ、子ノ権現ではこの地を下天寺と呼び、子ノ山の聖地として位置付けている。またこの時、子ノ聖の傍らに落ちていた龍の鱗は、後に「龍鱗石」として天龍寺の寺宝とされている。



芳延参道は降魔橋を過ぎると雰囲気の良い古道となり、車道を跨げばわけなく樹齢八百年余といわれる飯盛杉へと辿り着くだろう。天龍寺の縁起によれば、この杉は延喜十一年（911）、この峰に子ノ聖が初めて登山した際に、食事に使った二本の箸を地面に差したものが根付いて大樹になったという。本来、子ノ聖を祀っているのは子ノ権現社であって、天龍寺はその別当寺であった。開山は子ノ聖の草庵を譲り受けた弟子の恵聖上人で、その後は出羽国羽黒末であったが、宝永二年（1705）に寛永寺の輪王寺宮末となり、さらに明治以降は延暦寺末となっている。

ここで天龍寺のご住職に龍神について伺ってみたが、残念ながら雨乞いに関する話は聞けなかった。但し、雨に関しては「子ノ権現のある稜線は北の稜線に高山不動があり、南の稜線には高水山常福院があって、ともに真言の寺院に挟まれている。子ノ権現は天台で、とくに仲が悪いというわけでもないのだが、大祭では必ずどちらか一方に雨が降る」との謂れがあるそうだ。そして、子ノ権現の庫裡の脇から竹寺へと向かう。著名なハイキングコースは道標がしっかりしている為、眺望の良い尾根道もそれなりに楽しめる。しばらくするとかつて上名栗村と南村の中澤組を結んでいた豆口峠へと至る。この峠には展望はないが、昔日に行なわれていた神送りに関する話が記されていた。これは疫病神を村境まで送ってしまうという神事で、この峠ではその風習も途絶えたが都幾川の大野では未だこの神事を継承している。



この豆口峠から竹寺の鐘楼までは二十分とかからない。そして、その鐘楼を下れば牛頭天王本殿である。竹寺は通称で正しくは八王寺（医王山薬寿院）という。本来、本坊の御本尊は不動明王だが、神仏集合の寺として知られているように、境内社の牛頭天王が著名である。縁起には「天安元年（857）、慈覚大師東国巡錫の折、・・云々」とあるが、じつのところ開山・開基は不明らしい。しかし『新編武蔵風土記稿』には天龍寺門徒とあり、子ノ権現とともに寺の歴史は相当に古い。本殿はご存知の通り神社様式で銅製の鳥居には茅の輪が架かる。本坊も山岳仏教の雰囲気を残している感じがする。因みに牛頭天王像とともに合祀されているのが八童子像で、寺名もこの八王子に由来している。

神山弘著『山と伝説の旅』は、この竹寺の参道を下った栃屋谷の龍神伝説を掲載している。曰く「権五郎神社の裏山にはかつて精進池があり、そこに龍神が棲んでいたのだが、ある日、猟師が不浄の物を投げ込んだので龍神は怒って有間山に飛んで行き、それからは池も無くなってしまった」と。しかしこの権五郎神社近くには宗穩寺があり、有間の龍神伝説があっても不思議ではない。というのも、そもそも宗穩寺は吾野の法光寺末で、その法光寺は龍穩寺の直末となっているからだ。じつは前述の龍ヶ淵と同様に、越生の麦原にある龍穩寺末宝勝院下のマゴ淵も、有間大淵と繋がっているという話がある。つまり有間の龍神伝説は、龍穩寺の教線拡大に伴って付会され、各地に広がっていったとも思えるのである。



八幡坂峠もかつては栃屋谷と上名栗を繋いでいた峠で、竹寺から向かえばわけなく峠の切り通しへと至る。何を急ぐかは知らないが、下りのハイカーは堀割道を見捨てててんでに踏み跡をつけるので、さすがに古道も荒れ気味となっている。昔、この八幡坂を馬が通っていたのが不思議なほどの急坂であったが、その登山道入口にある馬頭観音（文政九年・1826）には、はっきりと八王寺天王道と刻まれていた。県道青梅秩父線に沿って流れる名栗川は、やがて有間川と合流して入間川となっていく。そして、その二つの川が合する所が下名栗の川又で、有間ダムに向かって橋を渡れば龍泉寺はもう目前である。

一名栗龍泉寺と有間谷の大淵



龍泉寺は龍穩寺の直末で、長享元年（1487）に示寂した玉林が開山し、正保年間（1644～48）に御州によって中興された。往時の面影は荘厳な山門に垣間見る事ができる。その山門脇に建立されている安永八年（1799）の六地藏ももとは北参道にあったものだが、道路改修によって現在の場所に移された。門前を走る舗装路は有間ダムへと向かうが、すでに昔日の有間谷の様子を伺い知る事はできない。有間谷は有間ダムによって水を満面と湛え、名栗湖という名の人造湖に変貌を遂げた。しかし、名栗湖畔に沿って上流へと向かえば、湖面をうち渉る風が心地よい。やがて小1時間ほど歩くと、有間溪谷観光釣場のある落合橋へと至る。大淵はここから有間林道を一キロほど歩いた大淵の入沢と滝ノ入沢の間にあるはずだ。

川にはあちこちに堰堤ができていて、かなりの変貌を遂げてはいるものの、龍神が棲むと云われるような場所は、森林河川を管理する者もそう簡単には手をつけない。実際に堰堤工事の際に発破を仕掛けたところ、一天にわかには掻き曇り突然の暴風雨となったので、龍泉寺に慌てて祈禱を頼み込んだという話も伝わっている。そして、龍神の棲む霊域はじつに現実社会と紙一重のところでは存在している。かつて有間の池とも呼ばれた大淵は、龍神宮（安永六年・1777）として祀られ

ていて、往時ほどではないにしろ、今も神淵の雰囲気は十分に残している。すでにご存知の通り、江戸幕府の公文書である『新編武蔵風土記稿』の記事は、多くの里譚を掲載してはいるものの、実際には「あり得ない」との見解を述べる事が多いようだ。しかし、この有間の大淵に関しては雨乞いの様子を実見し、その驚くべき様子をありのまま書き残している。

「有間淵は有間山の谷間にあり、人里を離れて数里余り。有間川の流れに沿って両岸をかわるがわるに移って巨石が並ぶ所を通り、また、道がない所は丸太を繋いで栈道の如くして渡り、あるいは川を離れて上下して行けば、やがて巨石が絶えた所に滝がある。一つは三尺ばかり落ちて淵となり、もう一つは五尺ばかり落ちて淵となっている。上の淵は三間四方で、下の淵は五間四方ほどだ。土地の人はこれを女男淵と呼んでいる。そして、これより西に十町ほど難所を進めば大淵へと至る。・・・中略・・・各所から流れ込む細流はやがて集まり、この大淵の周辺に至って勢いを増し、岩盤を穿つがごとく七、八尺の飛瀑となって響く様は、まるで雷鳴の轟くようである。そして怒るが如く大淵に注ぎ込んだ水は、碧色を含んで満ち充ちている。広さは八、九間四方はあるようだが、その水深は計り知れない。この周辺は巨石や怪石が並び立ち、杉や桧、また雑木が鬱蒼としていて凄まじい場所である。土地の人達はこの淵を龍神の棲む霊淵で、奇験を顕すとっている。

この日もすでに大淵の別当である龍泉寺より僧を出して祈願堂にて読経し、釈迦の血脈を投ずれば、すぐに中央より渦を巻いて水底に沈める有様は、さすがに龍神の感応という他はない。ここで雨乞いすれば、どんな旱魃の年にも雨が降らないという事はないといい、近くの郷村はもちろんの事、遠くは十里の外、二、三十里に及んで聞き伝えに訪ねて来るといふ。旱魃の年には彼の龍泉寺に就きて雫祭りの読経を請い求める人は日々たえまなしという事だ。最もその奇験によって人々恐怖し、崇敬することも他に類なしという。」(現代語訳)

因みにこの有間大淵の別当は龍泉寺であり、前述の通り、龍穩寺教線の拡大とともに有間淵を中心とした雨乞いネットワークが存在したとみてよいだろう。室町時代後期に開かれた龍穩寺は、戦国時代以降各地に末寺が開かれて発展していった。主要な末寺を拾って見ると越生町近隣を始め飯能市、寄居町、或いは川越市や大宮市、岩槻市といった県下のみならず東京近郊と着実に勢力を拡大し、江戸時代には関三刹として関東曹洞宗寺院を統轄するまでになっていた。



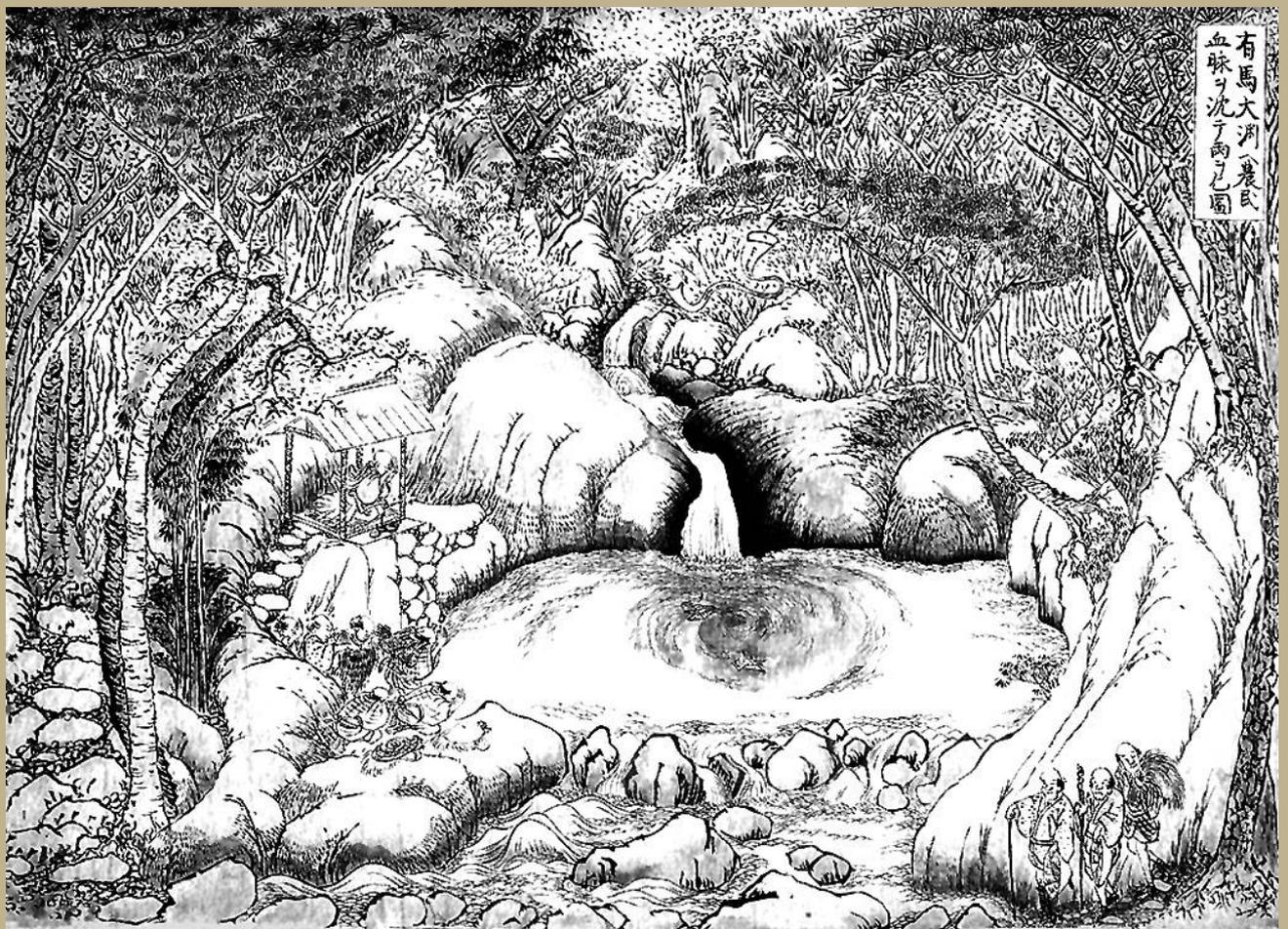
一方、有間大淵も世に知られ、雨乞いに訪れる代参は飯能市、日高市、入間市はもとより東京都や神奈川県に及び、ひとたび旱魃ともなると龍泉寺に大淵の水と龍王霊印の御札をもらいに来る村人達が、昭和の初期までは後を絶たなかったという。

館村(現志木市)に残る万延二年(1861)の『三役人出勤帳』には、雨乞い代参を派遣した時の様子が記録されている。それによると、まず水垢離をした代参二名は早朝に村を出発。新座～所沢～入間～飯能市と繋いで、午後一時頃には龍泉寺に到着したという。その後、大淵の祈願堂で「大雲輪請雨経」の祈祷が行なわれ、それが済むと龍淵の霊水を竹筒に入れ、直ちにリレー式で村へと持ち帰った。名栗から志木市まではおよそ四十^キほどだから、ちょうどフルマラソンと同じ距離を走る勘定である。途中で休むとそこで雨が降ってしまうから、休憩する事は許されなかった。そうして村に運ばれた貴重な霊水は、産土神の水と混ぜて祝った後、藁で龍を作って各々の畑に撒いたという。大正以降になると電車が登場して走る事もなくなったが、やはり車中では足踏みを続

けなければならなかった。龍泉寺に残る大正十二年（1923）～昭和三十九年（1964）までの「雨乞代参帳」には、延べ総代数が百十二組とある事から、龍神の御神徳が信じられていたのも、そう遠い昔の話ではないわけだ。

この龍泉寺の御札には龍を象った「龍王龍泉寺靈印」の版木が用いられていたのだが、明治四十三年（1910）の大洪水で大淵の祈願堂ごと流失してしまい、行方が判らなくなっていた。が、じつはこの時、笹井ダムで拾いあげた子供の家に保管されたままでいたらしい。その後、昭和三十年（1955）頃になって近所の人が保管していた御札と一致した為、龍泉寺のものだと判明した。龍王印の版木はじつに四十数年ぶりに龍泉寺へと戻ったのだ。そして、最後に記録に残る有間淵の雨乞いは飯能市の双柳で行なわれた。果たして、双柳にはその晩大雨が降り、関係者は大いに溜飲を下げたという。

奥武蔵の山々に雨乞い龍神が空を飛ぶ。確かに現代人からしてみれば、それは妄想の類なのかもしれない。しかし、現代人として情報の渦という虚構に埋没しているに過ぎない。或いは山里に暮す人々にとって、マスメディアが伝える情報のほうがはるかに絵空事のように映るかも知れない。人々は今や全てを支配している気になってはいるが、自然界に於いて自在に操っているものなどじつは何もないのだ。現実と虚構の狭間に漂う人々は、人力をもって天災地妖に抗えない事を知った時、そこで始めて我に帰り神に祈る。そうして、一時の混迷と喧騒が過ぎ去った後には、何事も無かったように、ただ澄み切った青空が広がるのみである。



『新編武蔵国風土記稿』 秩父郡 「有馬大淵へ農民血脈を沈めて雨を乞う図」